

10 岡山県立美術館

“県美”からサービス施設へ

1. 美術館の概要

- 開館年： 1988年
運営母体： 岡山県
都市人口： 61万6千人
- 延床面積： 14,269㎡
展示室面積： 3,501㎡
ホール： 211席
- 開館時間： 9:00～17:00
(ホールは9:00～21:00)
休館日： 月曜(休日の場合は翌日)、
年末年始
- 運営スタッフ総数： 31名
(非常勤含)
学芸課職員数： 7名
教育普及担当者数： 2名
(学芸課職員数、教育普及担当者数は内数)
- 所在地・連絡先：
〒700-0814 岡山市天神町 8-48
tel. 086-225-4800
fax. 086-224-0648
URL: <http://www.pref.okayama.jp/seikatsu/kenbi/kenbi.htm>

2. 美術館の特色、事業概要

- 郷土ゆかりの芸術家のすぐれた作品を収集・展示するとともに、内外の芸術活動を紹介する展覧会やイベントを開催し、県民の幅広い文化活動の発展に寄与することを目的として設置された。
- 主な収蔵作家：雪舟、宮本武蔵、浦上玉堂、小野竹喬、松岡寿、原撫松、坂田一男、国吉康雄、平櫛田中など。収蔵作品数は約1,600点。
- 常設展：県出身者や県ゆかりの芸術家の作品を

中心に展示。古書画は毎月、洋画・工芸は3ヶ月ごとに展示替え。

常設コレクションは、殊に、雪舟をはじめとした水墨画、近代洋画のコレクションが充実している。

- 企画展(1999年度)：
日本美術院創立100周年記念展
ウィーン美術史美術館所蔵 古代エジプト展
永遠の祈り 東山魁夷展
第50回岡山県美術展覧会
中山巍展
第46回日本伝統工芸展岡山展
第59回国際写真サロン入選作品展
新世紀開幕記念 特別ナポレオン展
- 英雄のロマンと人間学
- 企画事業費： 3,765万円
(人件費、施設管理費を除いた年間予算)
普及教育費： 399万円
(上記年間事業費の内数)
- 総入館者数：312,172人(1999年度)

3. 教育普及活動導入の背景、経緯

- 従来総務課の企画普及主幹がボランティアの調整、美術館内併設のホール事業を担当しており、教育普及事業は明確な指針がなく不十分であった。
- そうした中、若手学芸員が、岡山大学教育学部の教官、地元中学教員との協議を経て、地元中学校教員と岡山大学生、当館のボランティアを対象とした研修を実施。また、中学生を対象にした鑑賞ガイドツアーを開始。
- 1998年に美術館の予算が半減したため、従来以上に常設展重視の方向が強まった。あわせて自主企画のホール事業が廃止され、企画普及主幹のポストもなくなり、教育普及活動が学芸の業務範囲となる。



- 99年度に地元在住アーティストの小石原剛氏のvh協力を得て、教育普及活動として、それまでの作品解説や鑑賞講座などに加えて、継続的なワークショップ事業を開始。
- 98年、2000年度に教育普及担当者として中学校の美術教員が1名ずつ学芸課に配属され、現在学芸員7名のうち2名が、教育普及事業の専属スタッフとなっている。

4. 教育普及活動の内容と運営

◎ 教育普及活動の構成と内容

- ワークショップや鑑賞ツアーなどからなる「『こんにちは美術館』事業」に加え、ホールを使った様々なイベント(美術館主催の講座事業など)やボランティア活動、ビデオ制作、刊行物の発行(美術館ニュース、展覧会案内パンフレット、図録)なども、美術館の教育普及活動に位置づけられている。
- 『こんにちは美術館』事業は、99年度に県民に親しまれる美術館をめざして新たに始められたもので、以下の8つのプログラムが実施された(カッコ内は対象と延べ参加者数等、*印は2000年度も開催)。
 - 星取りって何(一般、18名)
 - 常設展観察日記(小学生以上、62名)*
 - 小学生・中学生鑑賞ツアー(小中学生、92名)*
 - 巨大デジタル水墨画を作ろう!(中学生、38名)*
 - 光を観る集い - ピンホールカメラをつくろう - (18歳以上の一般、20名)
 - 盲学校児童のためのワークショップ(県立岡山盲学校小学部児童14名、引率教員15名)
 - 生きてる! イケてる! 芸術作品をつくろう - 活人画選手権 - (高校生以上、68名)*
 - あなたも一日学芸員 - 絵画作品取扱指南編 - (16歳以上の一般、15名)*
- 2000年度は、*がついたワークショップの他に、「箔押しに挑戦!(伝統的な方法での箔押しを体験、展示室で金属を使った表現を探索、中学生以上)」のほか、特別展「みることの再発見 - もっと美術を楽しむために -」開催中に以下のワークショップを実施。
 - 幟旗(のぼりばた)をつくろう(幟旗の染織をし、美術館入口前広場に展示)
 - 海のイメージ・美術館のイメージ(「海」と「美術館」をイメージする色の色紙を貼りつけるワークショップ)
 - ピカる~ん! みえる~ん! (同じ絵が明るさの違いによって見え方が異なることを体験)
 - 絵の具づくりに挑戦! 展示室では名探偵(絵の具づくりのワークショップ)
 - THE 銅版画(銅版画制作実技講座)

◎ ガーデン - 現代美術をとおしてみる後楽園 -

- おかやま後楽園300年祭の一環として「ガーデン - 現代美術をとおしてみる後楽園」を共催(主催:おかやま後楽園300年祭実行委員会)。
- 日本三名園のひとつである後楽園を、空間構成(景観)、歴史、現代都市における機能などから再発見し、21世紀の後楽園との豊かな関係を現代美術をとおして考える試み。
- 11名の現代美術家が空間の特性にあわせた作品を制作・設置。
- 参加作家のひとり太田三郎による「Bird Seed Project(鳥達を相手に餌と植物の種を交換するプロジェクト)」や、「地域と芸術計画」による「御庭草履ワークショップ(希望者に園の入り口で草履を貸し出し、昔ながらの方法で、後楽園を足の裏から体験・鑑賞する試み)」など、市民参加型の催しも実施された。
- こうした多義的な観察や教育普及的な試みは、通常の美術館活動を進展するものであった。



「県美子どもツアー」ちらし

◎ 学校との連携について

- 中学生のガイドツアーを受け入れると同時に学校との意見交換会を開催。学校へのチラシ配布、ポスター掲示、ギャラリートークなど、先生方から美術館への要望が多数出た。
- それを受ける形で、教員向けに解説プログラムを用意した夜間開館を実施したところ、当初は多数の来館者があったが、徐々に減少していっ

た。学校側には、福利厚生事業の一環という認識が強かったように思われる。

- また、特に地域の離れた教員同士の情報交換が少ないため、県立の美術館が県下の全域の学校と連携するには、解決すべき課題も多いのが実状。
- 総合的学習の時間に対応し、「調べ学習」という形で、事前準備もなく、子どもたちだけ2～3人で

◎ 主な教育普及事業の概要

事業の名称(開始年度)	事業の内容(実績は1999年度)、課題や今後の展望				
常設展観察日記 (1999年度)	<ul style="list-style-type: none"> • 参加者に、年間の常設展(展示替ごとに約10回)をすべて鑑賞し日記をつけてもらう。参加は登録制。 • この鑑賞日記は、学芸員との交換日記の体裁をとっており、個人の鑑賞日記は、展示室入り口に常置されている。 • 学芸員とのやりとりをとおして作品をより深く理解し、美術館により親しめるようにすることが事業の目的。 • 今後は、応募者拡大に向け、積極的な広報活動を展開し、美術館のブランド事業として位置づけていく予定。 				
	対象	参加者数	実施頻度	参加料	予算規模
	一般市民	62名	月1回程度	¥1,000(～18歳) ¥2,000(19歳以上)	-
県美子どもツアー (1998年度) * 2000年度に「小・中学生鑑賞ツアー」から改称	<ul style="list-style-type: none"> • 事前に研修を受けた県美のボランティアが、参加者と対話しながら常設展の作品を鑑賞するワークショップ。 • 毎週日曜日、午前11時開催。参加者は小中学生を含む5人までのグループで、各回3組まで。 • 参加者が相互にさまざまな作品の見方に気づいたりしながら、より一層美術作品に親しんでもらうことが目的。今後の課題は参加者の拡大。 				
	対象	参加者数	実施頻度	参加料	予算規模
	小中学生	92名	週1回程度	常設展入場料	-
巨大デジタル水墨画をつくらう! (1999年度)	<ul style="list-style-type: none"> • 展覧会に展示される水墨画作品をグレートーンの色紙によってモザイク上に拡大模写し、巨大掛け軸に仕立てるワークショップ。水墨画を中心とする鑑賞ツアーも実施。 • 絵画作品の全体と部分の関係や細部の成り立ちなどを注意深く鑑賞してもらうことがねらい。 • 現在は参加者数が限られているが、美術館所蔵作品の中核である水墨画への理解を促進するため、将来的にも継続実施の予定。 				
	対象	参加者数	実施頻度	参加料	予算規模
	中学生	38名	年1回	無料	-

美術館に預けられることがあるが、美術館側では対応に苦慮することもある。

- 学校の美術教師を対象に、鑑賞手法の講義を行うこともあるが、その場合は、「美術館ではこういった鑑賞手法を用いています」というサンプル紹介の形式を取っている。
- 鑑賞手法のポイントは、作品から取り出せる情報(色、サイズ、対象など)は何かを整理し、それを聞き出すこと。作品解釈は多義的であり、ひとつの答えがあるわけではないので、ナビゲータとしての役割が重要。
- 長期的な戦略として、岡山大学、附属中学と共同で、芸術教育に携わろうという意識を持った教員が育つような教育のプログラムの研究にも取り組み始めている。

◎ 県立美術館の役割 - 公開シンポジウム開催

- 岡山県は県域が広く、地域同士のつながりを作ることが必要という認識から、当館が事務局をつとめる岡山県博物館協議会の主催で、2000年10月に公開シンポジウム「岡山・地域社会とMuseum - 学校・生涯学習・文化施設 - 」を開催。
- 地域社会と学校との連携や生涯学習の場としての文化施設のあり方が問われるなか、岡山という地域社会において、今後の美術館・博物館施設が担える可能性を探ることが目的だった。
- シンポジウムをとおして、それまでつながりの薄かった美術館・博物館職員と学校との先生とのネットワークづくりが促進された。

◎ アーティストとの連携

- 99年度に9名(内8名が岡山県出身)の現代作家による「アートラビリンス」という展覧会を開催。
- 地域社会における美術館の役割を検証するために企画・実施したもので、アーティストも作品の中に「美術館というものをみんなで考えてみよう」と

いうメッセージを盛り込むなど、観る側とアーティストの双方にとって意味のあるものだった。

- 特定のアーティストとの連携を継続することが困難なこと、また、外部の専門家と共同で開発したワークショップ・プログラムの場合、著作権の考え方を明確にする必要があることなども課題。

5. 教育普及活動の効果、今後の課題と展望

◎ 教育普及活動の実施に伴う効果

- 美術館以外の人との関係を持つことによって、美術館の活動を外部から相対化してもらうことができ、その結果、「美術館はサービス施設であり、受益者還元をしなければならない」という意識が内部に出てきた。
- 学校や親子のことなどに対する理解が進んだこと、何か事業をやるときに顔を出してくれるコア・サポーター的な市民が出てきたことなども、教育普及活動の効果。

◎ 課題と今後の展望

- 今後は、特定の学芸員に依存しない「ミュージアムの戦略としてのシステム化された普及活動」を構築することが課題。
- とくに岡山県立美術館の場合は、常設展を起点にした美術館戦略の一環として普及活動をとらえようとしている。
- ワークショップ参加者など、普及活動でつながりのできた市民をネットワーク化していくことも重要。これまでの参加者への呼びかけが効果的に行われていない。
- (他の美術館などでも)教育普及専属の担当者が設置されるケースが出てきたが、一方で、教育普及しか知らない担当者が増えていることも事実。質の高い普及プログラムを企画・実施するためには、館全体の運営について把握するとともに、作品鑑賞の専門的知識や経験も不可欠

である。

- 観客開拓については、最も来館の少ない40～50代の男性をいかに美術館に呼び込むかが大きな課題。
- 総合学習の受け皿となるためには、教育現場との連携を密にしてニーズを把握し、積極的にプログラムを開発、提供していくことが必要。その一方で、週末などの家族単位の利用促進も図ることなども重要である。
- 美術館本来のミッションを忘れることなく、「作品の保存・公開」と「(美術館は)サービス業である」という二つの基本的な考え方の均衡を取りながら運営することが最も重要。